

栗本 薫

天狼星

II



てんろうせい
天狼星 II

くりもと かおる
栗本 薫

© Kaoru Kurimoto 1990

1990年11月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-184803-8

江苏工业学院图书馆
藏 书 章
天狼星

II

栗本 薰

講談社

天狼星Ⅱ——目次

第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章	プロローグ
珊 さん 底 ち 羅 ら	頰 あ 爾 じ 羅 ら	安 あん 底 ち 羅 ら	迷 め 企 き 羅 ら	伐 ば 折 さ 羅 ら	宮 く 毘 び 羅 ら	
172	141	110	76	43	13	9

解説	第七章	第八章	第九章	第十章	第十一章	第十二章
郷原 宏	因陀羅 いんだら	波夷羅 はいいら	摩虎羅 まこら	真達羅 しんだら	招杜羅 しょうとら	毘羯羅 びかから
	206	239	271	305		
401					337	369

初出誌／「小説現代」一九八七年三月号―八月号
単行本／小社より一九八七年十一月刊行

天狼星Ⅱ

プロローグ

一九八×年は、うららかに明けた。

というか、少くとも、人びとの目には、そのように見えたのであった。恒例の、年末、年始のさまざまな行事、某国営放送の歌合戦だとか、何とか大賞、初詣も、初日の出も、順番どおりつつがなくおこなわれた。天候もよく、あたたかな、まことにのどかでおだやかな新年であった。ひかれるおみくじは、ことごとく「吉」や「大吉」であったし、あまり景氣がもち直したわけでもなかったが、このところのさかんな懷古ブームに乗って、町にはことのほか、和服姿の女性が多く、それが、車の少なくなった正月の町に、いっそうゆったりとした正月氣分をかもし出していた。

そう思ってみるせいなのかもしれないが、正月早々の新聞の紙面も、例年に比べて何となく波乱が少ないようであった。毎年、必ず出る、もちをのどにつまらせて死ぬ老人も、今年は二、三件しかなかった。「正月早々焼け出され」だの、「一家惨殺」だのという記事も、見られなかった。正月一日の新聞の、社会面のトップは、「初詣に夜とおし三万人」で、三日のトップ記事は、「東西に文化のかけ橋」という、篤志家の尽力によってパリでの舞踊公演が実現の見とお

し、という、まことにのどかなものであった。

ここ数年來、じっさいの景氣のよしあしや、事件や、社会の動向とは必ずしも関係なく、人心はとかく荒^{すさ}みがちであつた、ということは、多くの識者の認めるところであつた。むしろ、事件はおおむね同じように起つてゐるのであるが、それをうけとめる人々の心が荒れ、動揺しやすくなつてゐるからこそ、ことさらに凶變のあかしとなりそうなことどもばかりをひろいあつめ、より出して、記憶にとどめ、口の端^はにのぼせたのである、と云うことも、できたかもしれない。

じっさい、世の中というものは、つねに多事多端ではある。——大地震、飛行機事故、列車事故、大金の強奪^{ごうだつ}、火山の噴火、異常氣象、殺人、放火、いじめ、通り魔、自殺、狂言強盜、自動車事故、ひったくり、ストライキ、デモ、リンチ、ネズミ講。世に、新聞記事の種ばかりは、決して尽きることがない。

その上に、それをいつそう色あざやかにいろどるかのような、あの流言蜚語^{ひびご}というやつがある。毎年毎年、飽^あきもせずにくりかえされる、今年こそ東京大地震説、富士山大噴火説、うんぬん、かんぬん。

それだけをきいておれば、この世の中などもう何十回滅亡したかわからぬくらいなのだが、今年もやっぱり、地震は三月だそうだ、いや十一月だ、グランド・クロスだ、ファティマの太子言だ、と人々が不安そうにささやきあつてゐる、ということ、そのものが、去年も同じようにくりかえされたあやしいそのささやきが、結局のところすかしつ屁^べ同様、何の実体もちひしなかつたことの、一番はつきりとした証拠というものであつた。といつて、一回でもそれが的中してし

まえば、それっきり二度とそういうわさは流れなかったであろう——ともかく、流す方も流される方もいなくなってしまうのだから——から、むしろ、うわさが性懲りもなくどこから流れてきてははびこる、ということは、平和のひとつの象徴で、嘉すべきでさえあったのかもしれない。

もし、そんなふうには、ひねくれた考え方をするものがいたとしたら、だからむしろ、この新年のうららかさは瑞祥とはいえない、不吉である、などと理屈のひとつもこねたかもしれない。この数年来、ずっと人心は何がなしわさわさとおちつかず、世紀末とグランド・クロスと双方の一年ごとに近づき来るあやしい波動に心ざわいでもやめぬかのようにとかく頹廢、とかく狂気の沙汰へと向かいがちであった。それが、中休みのようにばかりと迎えたこのしずけこそ、むしろ逆に、人々の不安が表面的なものでなくなり、しっかりと心中深く根づいてしまったあかしである——と。

とまれ、まだ、一年ははじまったばかりであった。

じつさいには、年があらたまるといったところで、今日が昨日のつづきであることにはいささかのかわりもなく、年がかわっても、大宇宙の黄金律にも、たいていの人々の心のしがらみや思いにも、急にどんでん返しがあるわけでもありはしないのだが、それでもとりあえずは、年が明けた、というだけで、血塗られ、汚れ、くたびれた世界がすべて新しく無垢に生まれかわったかのように思われるのは不思議というほかはない。が、そんなわけで、世界は、うららかな、つかの間の平和と安息を久々にゆったりと味わっているかのようにであった。

そして、それが、たちまちのうちにまたあやしい夜闇の世界へと変容をとげてゆくのも、これまたいつものことであつたのだ。

第一章 宮毘羅^{くびら}

I

と、いうわけで――

風もなく、うららかな、おだやかで天候のよい新年であつた。

最近では、正月の三日だけが、大東京の空から汚れた排気ガスと車の騒音が消え、くっきりと青い空としんとしずかな町並と、すいすいと走るいつもよりは少ない車、という、本来あるべき姿をとりのどす時になつてゐる。道路では、けたたましい排気音やクラクションのかわりに、子どもたちの遊ぶ声がきこえてくる。雀の、チュンチュンと鳴きかわす声もきこえる。ふくらんだ白梅の香りさえしてくるようだ。娘たちは、晴着をまとい、気取つて、つんとあごをあげたり、すそを気にしながら歩いてゐる。エスコートする男の子たちでさえ、日ごろよりひと回り大人になつたかのようなのだ。

そんなことをぼんやりと思ひながらちびり、ちびりと昼間から酒をすすっているこの家の主は

といえ、すっかり深い椅子に体が沈んでしまつて、机の上にぬつとつき出た、二つの足しかみえない。その両足が、紺この、サイズ二十六の足袋たびにつつまれていることからして、たぶん上は和服である。その組んだ足の両側に、一体全体どういふつもりであるのか、小さな、二十センチくらいの門松が置いてあるのは、何とも珍妙な眺めであつた。まるで、骨ばつた細い足首さえなければ、紺色の、奇妙な形の鏡餅かがもちみたいになえ見えたかもしれない。

しかし足の主の方からは、いっこうにそれが珍とも妙とも感じられぬらしく、しばらくそうやっていたと思つたら、そのうちこんどはぐーツ、ぐーツ、という何とものどかな音が、椅子の方からきこえてきはじめた。つまりは足の持主は、ぐっすり寝入つてしまつたのである。

まことにもつて天下太平というか、極楽とんぼというべきこの情景は、そのまま放つておけば何時間でもつづきそうであつた。電話も鳴らないし、生首の入つた箱をかかえた郵便配達がベルを鳴らしもしない。少しづつ、うららかな空がかけりはじめ、カーテンをあけつ放しの窓の彼方かなたに、たそがれの淡い色あいがおきて来はじめる。

が、幸か不幸か、このままにしておいたら、風邪をひくことうけあいの、この平和なうたたねは、一時間かそこいらしかつづかなかつた。

そんなにガタンピシャンガツシャーン、というすさまじさでこそなかつたが、ノックもベルも何もなしに、やにわにドアがひきあけられ、そして、呆あきれはてたような大声が、平和な静けさを一気に破つたからである。

「あら、まあ」

どうにも、あいそがつきはてた、というような大声であった。

「なんてこと。——どうせ寝正月だろうと思つて来てみれば、寝正月は寝正月でもデスクでうたたねとはね！　ちよつと、起きなさいよ、大介さん！　そんな恰好でねていると、カゼをひくわよ。それより、苦しくはないの？　ちよつとつてば！」

むろんのこと、伊集院大介が、仰天してとび起きたのはいうまでもなかった。

たしかに、あまり、ほめられた恰好とは云えなかったかもしれない。めがねは顔の横にずりおちて、そのつるでほつぺたに赤いあとがついていたし、せつかく着こんだ一張羅の紺の大島のお対も裾ははだけ、衿はゆるみ、にゅつとやせたすねがつき出して、その上、無精ヒゲが色白の顔をむさくるしくいろどつていようというありさまである。このところ、伊集院大介は床屋に行つていなかったで、蓬々とのびた髪の毛がけつこうな長さになって、まるきり、明治の貧乏書生、という恰好であつた。

「や、や、や。いつのまにか、すっかりよく寝ちやつた。あつ、カオル君——あれ、いつ来たの？　あれつ、もうこんな時間！」

半分椅子からずりおちたかつこうになつた大介は、すっかりうろたえて立ちあがり、めがねを細い鼻柱の上にずりあげ、ずつこけた着物を何とか直そうとじたばたしはじめた。しかしまだ半分寝ぼけていたので、かえつて逆の方向にひっぱつてしまい、鮮かに「洛中洛外図」を染出した長襦袢がすっかり出てしまった。

「あれつ、武彦君も一緒だったんですか。あ、明けましておめでとうございます。ともかく、あ